



Title	都市農村交流からみた臨時雇用労働力の可能性：北海道厚沢部町「農楽会」における農業アルバイトを事例に
Author(s)	上野, 綾; 小林, 国之
Citation	北海道大学農経論叢, 74, 87-97
Issue Date	2020-12-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81637
Type	bulletin (article)
File Information	09_p87-97.pdf



[Instructions for use](#)

都市農村交流からみた臨時雇用労働力の可能性 －北海道厚沢部町「農楽会」における農業アルバイトを事例に－

上野 綾・小林 国 之

Importance of Building Various Relationships for Securing Agricultural Workforce and Enhancing Interaction between Urban And Rural Areas: A Case Study of Agricultural Part-Time Job at “Nourakukai” in Assabu-cho, Hokkaido

Aya UENO, Kuniyuki KOBAYASHI

Summary

In recent years, the labor shortage in agriculture has become more serious, and it has become difficult to secure the temporary labor force that has been procured in the region. On the other hand, young people are becoming more interested in rural areas, and the temporary labor force may be an opportunity for exchange between urban and rural areas.

In this article, we analyze the acquisition of agricultural part-time workers not only as a means of securing a labor force but also from the perspective of exchange between urban and rural areas in order to discuss a new solution to the problem of securing a labor force in agriculture. This study (1) considers the possibility for agricultural part-time workers to attract people with diverse interests to the region, (2) analyzes the cooperation implementation system between agriculture and other efforts and the host entity, (3) and clarifies the establishment of relationships with the region by people who visit the region through agricultural part-time jobs.

When considering an agricultural part-time job as a form of urban-rural exchange, it is necessary for the area that provides the agricultural part-time job to be aware of the interests of employees and to build a business that makes the best use of the characteristics of the area. In addition to farm work hours, it is also important for the employer side to provide opportunities for exchange, such as exchange time and participation in local events.

1. はじめに

近年、若者層を中心として農村地域への関心が高まっており、農作業への従事をきっかけに、農村地域を訪れる者もある。本稿では、農業における臨時雇用労働力を労働力としてだけでなく、農業従事による都市農村交流の契機としてもとらえ、農業を通じた地域との関係性構築の可能性について明らかにする。

今日、少子高齢化や農村地域からの都市への人口流出などにより、農業の労働力不足が深刻化し

ている。さらに、後継者や常用雇用者の不足に加え、農繁期において地域内や近隣地域から調達してきた臨時雇用労働力も、地域の人口減少に伴って獲得が困難になっている。一方、インターネットの普及などにより、地域内や近隣地域だけではなく、遠方地域からも通う労働力の獲得が可能となっている。労働者の中には、季節ごとに就農先を変える流動的な季節労働者も存在し、情報通信技術が普及した現代において、労働者側も就農先の選択肢の幅が広がっている。2020年3月31日に閣議決定された「新たな食料・農業・農村基本計

画」においては「多様な人材が活躍できる農業の『働き方改革』の推進」が施策の一つに掲げられ、多様な人材としての臨時雇用労働力などの受け入れは、今後の地域農業を支える上でますます重要性を帯びる。

全国には上記のような臨時雇用労働力を受け入れてきた事例がいくつかみられている。1つ目は、愛媛県西宇和郡の事例である。西宇和郡では、1994年から現在に至るまで25年以上、みかんの収穫期に「アルバイト事業」が実施しており、全国各地の若いフリーター層を臨時雇用労働力として受け入れている（李2004、曲木2019、岩崎2020）。2つ目は北海道富良野市の事例である。北海道富良野市のふらの農協は、農業ヘルパー事業を確立し、首都圏を中心とした日本全国から臨時雇用労働力を獲得している（福澤2018）。

福澤（2018）は、農業に従事する流動的農村労働者は農業に対して、職業的魅力と人間関係の魅力を感じていると述べ、彼らの中には積極的に季節労働を選択している者がいることを明らかにしている。また李（2004）では、上述の「アルバイト事業」において、流動的な季節労働者の中でも、収入を得ることだけを目的としない労働者は単なる労働者ではなく、「都市・農村交流の相手であったり、消費者のニーズを教えてくれるアドバイザーであったり、作業中に楽しい話を聞かせてくれるよい友達」であると述べ、都市・農村交流を含む新たな季節労働の可能性を論じている。このように先行研究から、季節労働は農業や農村地域に対する関心の着地点として、また都市の農村の交流の場として、従来の単なる賃金労働とは一線を画する状況が生まれていることがわかる。一方でこれらの議論は、労働者と農家間、労働者同士の関係性の構築など、限定的な範囲内でのみの議論となっている。

近年、若者の農村地域への関心が高い傾向にあり、それは「田園回帰」という言葉に代表される。小田切徳美（2014）は、「田園回帰とは、必ずしも、農山村移住という行動だけを指す狭い概念ではない。むしろ、農山村（漁村を含む）に対して、国民が多様な関心を深めていくプロセスを指している」と述べており、李（2004）や福澤（2018）の事例も田園回帰の一つであるといえ

る。さらに交流人口と定住人口の間に存在する「関係人口」も注目されており、地域への関わり方は多様化している。農業アルバイトなどの臨時雇用労働力の獲得を労働力の確保としてだけでなく、「都市農村交流」という視点からも分析することで、農業の労働力確保という課題の解決に新たな議論をすることが可能になるのではないかと。

都市農村交流の契機として農業アルバイトを捉えることで、農業だけではなく農村地域への興味・関心のある層を惹きつけることが可能であり、さらに農業を超えて交流の輪が広がる可能性もある。以上を明確化するために、本稿では次の3点を課題とする。①農業アルバイトが多様な関心を持つ人々を地域に惹きつけることが可能であるか、②農業とそれ以外の取り組みとの連携実施体制と受入主体の分析、③農業アルバイトを通じて地域を訪れる人々の地域との関係性を構築、である。以上から都市農村交流としての農業アルバイトの可能性について検討する。

本研究では、北海道檜山郡厚沢部町の任意団体「農楽会」が行っている農業アルバイト受け入れ事業を取り上げる。農楽会の取り組みは、農業アルバイト期間中に狩猟免許取得に向けた講習や自動車学校での免許取得に向けた教習を受講可能であるなど、新たなきっかけづくりが行われている。さらに、参加者同士や参加者と農家の交流が盛んであり、参加者は地域への行事にも参加している。研究方法としては、農楽会事務局、農楽会所属農家、参加者への聞き取り調査のデータをもとに分析を行う。なお、聞き取り調査は2019年6月15日・16日、2019年8月24日から2019年9月1日に実施した。

2. 農楽会の臨時雇用労働力の受け入れ体制

1) 厚沢部町と農楽会の概要

厚沢部町は、北海道南部の渡島半島檜山管内に位置する農林業を基幹産業とする町である。人口は2000年5,285人、2010年4,614人、2015年には4,049人と減少傾向にあり、2020年6月末の時点では3,727人である。また、2016年時点で高齢化率は39%を超えている。檜山南部地域最大の農業地域である厚沢部町であるが、2015年農林業セン

サスによると農業就業人口は504人、うち65歳以上が265人というように農業従事者も半分は高齢者が占めており、離農者の増加や後継者不足が問題となっている。なお、農業経営体数は255経営体である。作付面積は、水稲、大豆、ばれいしょ、小麦が多く、その他にだいこん、スイートコーン、かぼちゃ、アスパラガス、ブロッコリーなどが生産されている。

農楽会は2015年に設立された農繁期に農業アルバイトを受け入れる任意団体である。農業アルバイトの受け入れ自体は2014年から始まっており、2019年度において所属する農家戸数15戸、事務局2人で構成されている。なお、2019年度の参加者数は46人、うちリピーター6人である。

図1をもとに農楽会の役割について説明する。農楽会のアルバイト募集で特徴的な点は農業アルバイト期間中に、自動車やバイクなどの運転免許や狩猟免許取得のための講習が受講できる点にある。参加者は①農業アルバイトのみを行う、②農業アルバイトをしながら狩猟免許取得のための講習を受講する、③農業アルバイトをしながら厚沢

部町内の自動車学校に通う、以上いずれかでの参加が可能である（註1）。②では、厚沢部町の猟友会の協力の下、網猟、わな猟、第一種銃猟（装薬銃、空気銃）、第二種銃猟（空気銃）の4種類の狩猟免許の取得を目指すことができる（註2）。具体的には、免許取得のための試験対策講座や試験申請のための申請書類の添削などのサポートを受けられることができ、厚沢部町猟友会のハンターに直接、罟の仕掛け方を学ぶ技術指導も含まれている。なお、銃猟に関しての技術講習は危険性を考慮し、実施していない。③は「0円免許合宿」と呼ばれ、農業アルバイト代を自動車学校の講習費に充てることでその費用が相殺されるという制度である（註3）。参加者は農業アルバイトを行いながら、厚沢部町内にある自動車学校に通い、自動車普通免許、普通二輪免許、大型特殊免許などの免許取得を目指すことができる。

農楽会事務局が地元の猟友会に講師を依頼し、日程調整を行っている。また、自動車学校に対しては、教習生の紹介を行っている。自動車学校に関して農楽会は教習生を自動車学校に紹介をする

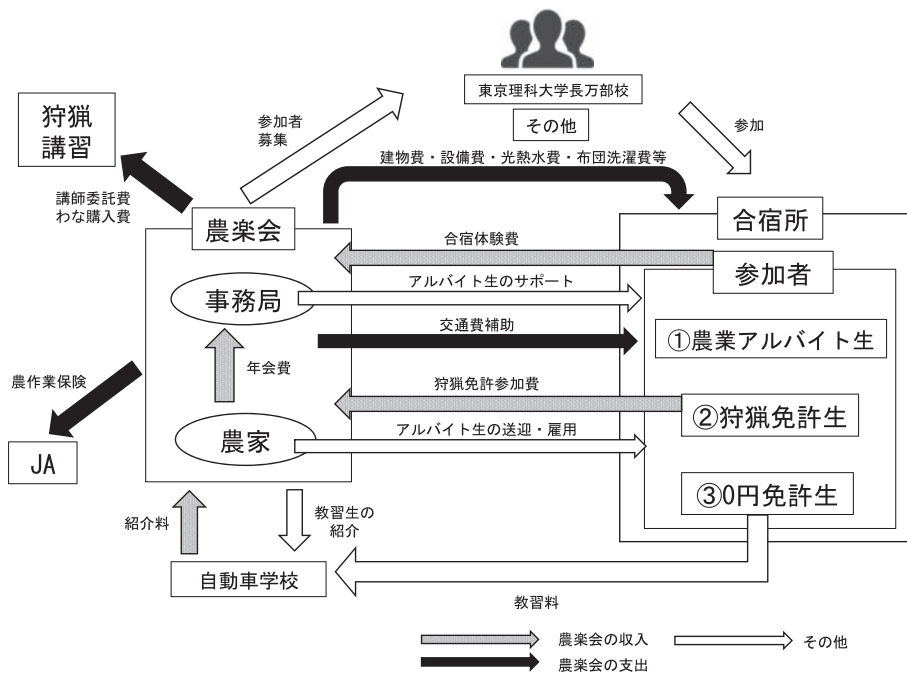


図1 農楽会の受け入れシステム

資料：2019年度聞き取り調査より作成。

にとどまり、教習と農作業の調整については、入校後に0円免許生自身が行う。

参加者は町内3カ所の合宿所のいずれかに滞在し、合宿体験費(宿泊費)として2週間あたり6,000円を支払う。また、滞在期間中における食費も参加者負担である(註4)。それに加え、狩猟免許生は狩猟免許参加費39,800円、0円免許生はそれぞれ取得を希望する免許に応じた講習費を自動車学校に支払う必要がある。

参加者の就業可能期間は農繁期である7月下旬から9月末であり、最短滞在期間は2週間である。その期間中、参加者は農楽会所属農家のいずれかに割り振られ、農業アルバイトを行う(註5)。基本的に一軒の農家のみでの就業であり、複数の農家で就業することは少ないが、生育状況などにより就業先の農作業が休止になった場合、人手が必要な農家のところで就業する場合もある。各農家は、期間中に2人から6人の参加者を受け入れている。勤務時間は農家によって異なるが基本的に7:00~17:30で、午前、昼、午後の計3回の休憩があり、実働8時間である。2019年度における時給は835円であり、日給は6,680円である。昼食代は一律で1日500円であり、給料から差し引かれる(註6)。なお、給与は農家から参加者に直接支払われる。作業内容は時期や農家によって異なり、ばれいしょやカボチャ、スイートコーンの収穫及び選別など様々である。また合宿所から畑への移動及び送迎は各農家で行うが、合宿所近隣の農家の場合、参加者は合宿所にある自転車直接、農家宅に集合する。雨天などにより作業がない場合は休日となる他、参加者は農家に直接、休暇希望の旨を伝えることで休暇を取得できる。さらに、狩猟免許生や0円免許生は講習があるため、午前や午後のみでの就業になる場合もあり、それらについても狩猟免許生及び0円免許生は、直接農家と日程調整を行う。狩猟免許生においては、事務局が合宿所から講習場所への送迎を行い、0円免許生においては自動車学校の送迎車が合宿所から送迎を行っている。

農楽会の運営費には、参加者からの合宿体験費2週間6,000円、狩猟免許生からの狩猟免許参加費39,800円の他、自動車学校からの紹介料、各農家からの年会費2万円が充てられている。これら

の運営費は合宿所の建物費、設備費、光熱水費、布団洗濯費や、参加者の農業保険や交通費補助(一律1万円)、狩猟免許講習の講師委託費や、わな購入費に充てられている。また、農作業に必要な帽子や長靴、農作業着などは農楽会ではなく、各農家が負担する。その他、合宿所の調理器具や食器類、洗濯機、自転車など、参加者の日用品は、多くが農家や厚沢部町民からの寄付である。

参加者募集は、農楽会を設立したA(後述)が自身のブログで行う他、厚沢部町近隣の東京理科大学長万部キャンパスで農業アルバイト募集のプレゼンテーションを行っている(註7)。参加者は応募フォームに参加期間や参加動機などを入力し、それらを元に選考を実施し、6月中旬に参加者が決定、7月上旬に派遣先の農家が確定する。なお、参加決定後のやり取りは農楽会事務局と参加者間でメールにて行われる。2019年度の事務局はAとAの妻が担当している(註8)。事務局の役割としては、総会の開催、参加者の募集、応募時点での参加期間の日程調整(註9)、農作業保険の加入の手続き、農楽会の参加に関する郵便物の送付、滞在期間中のサポート、農楽会資金の運用など多岐にわたっている。さらに、これらをA夫妻はボランティアで行っている。特に農家と参加者、自動車学校や狩猟免許講習関係者との調整役(コーディネーター)として初年度から関わってきたAの役割は大きく、農家側と参加者の両者のバランスをとる存在として重要である。AとAの妻は、ほぼ毎日合宿所を訪れ、参加者とコミュニケーションをとることで参加者の様子を把握し、問題があれば対応するなど、合宿生活をサポートしている。

2) 農楽会の設立と変遷

農楽会設立者のAは埼玉県出身で、現在は厚沢部町役場に勤務している。Aは大学在籍中の2013年8月に厚沢部町地域おこし協力隊の農業活性化担当として着任し、厚沢部町当路地区で農業研修をしていた。その間農業の労働力不足を強く感じ、その解決策を模索している中、東京理科大学出身で長万部キャンパスに在籍していた友人の「長万部キャンパス在籍中の長期休暇に道内でアルバイトをしたかった」という話をきっかけに、

表1 参加者数と農楽会所属農家数の推移

年度	参加者総数(人)	農業 アルバイト生(人)	0円免許生(人)	狩猟免許生(人)	農楽会所属農家 (戸)
2014	11	11			5
2015	25	20	5		8
2016	37	15(3)	9	13	14
2017	24	14(2)	4	6	14
2018	30	9(2)	7	15	14
2019	46	26(9)	7	14	15

資料：農楽会資料より作成。

注1) 2018年度及び2019年度は狩猟と自動車学校、両方の講習に参加した参加者がおり参加者総数は一致しない。

注2) 農業アルバイト生の()内の数字は東京理科大生以外の参加者数である。

2014年、東京理科大生（以下、理科大生）11人を農業アルバイトとして受け入れた。また、2014年度の参加者にAが次年度の長期休暇の予定を尋ね、自動車の免許を取得するという話を聞いたことがきっかけで2015年度から0円免許生の受け入れが始まった。なお、同年に農楽会が設立された。また、農業研修の中で獣害被害の深刻さを感じたAは、狩猟の免許取得しており、Aが狩猟免許を取得しているという話を聞いた参加者が、狩猟免許に興味を持ったことで、2016年度からは狩猟免許生の受け入れが始まった。

表1は年度ごとの参加者及び農楽会所属農家数の推移である。2014年度から増加傾向にあり、2019年度は参加者数がこれまでで最大である。なお理科大生は全員、農業アルバイト生に含まれ、0円免許生および狩猟免許生には含まれない。

3. 参加者からみる農楽会

1) 参加者の特徴

以下では、農楽会の資料及び聞き取り調査から参加者の特徴について見てみよう。参加者は、本州や九州など、全国各地から集まっている（註10）。年齢は2019年の参加者46人のうち10代22人、20代21人で9割以上を占めている。また、滞在期間は原則2週間以上と募集しているため2週間以上3週間未満が19人とおおく、3週間以上1ヶ月未満8人となっている。一方で2ヶ月以上9人、1ヶ月以上2ヶ月未満7人と夏の間をここで過ごしている参加者もいる（残り3人は1週間以上2週間未満）。男女比は男性56.5%、女性43.5%と男

表2 農楽会の事業内容別にみた情報入手先(%)

情報入手先	農業アル バイト	狩猟免 許合宿	0円免 許合宿
SNS・ブログ	18.2	18.2	0.0
検索エンジン	0.0	27.3	57.1
家族・友人・知人	20.8	54.5	42.9
その他	70.8	0.0	0.0

資料：農楽会が2019年度に実施したアンケート調査より作成。

注) 回答数は、農業アルバイトは26人中24人、狩猟免許は14人中11人、0円免許合宿は7人中7人である。

性がやや多い傾向にある。表2から、農楽会を知るきっかけの多くは、インターネットでの検索や、友人などからの口コミである。参加者は、インターネットで「0円」「免許」「狩猟」などのキーワードで検索して農楽会に至っている。なお、SNSに関しては、Aのブログのみで募集情報の発信をしている。また、「農業アルバイト」でその他が7割を占めているのは、Aが毎年行っている東京理科大学長万部キャンパスにおける募集プレゼンテーションがきっかけと考えられる。表3から、参加理由は「楽しそうだったから」が農業アルバイト生、狩猟免許生、0円免許生で共通して高い。狩猟免許合宿生の回答では「狩猟の現場を見てみたかったから」の回答が一番多く、0円免許生の回答では「北海道に行きたかったから」の回答が一番多い。また「安く免許が取れると思ったから」も40%の回答を得ている。「農業を経験してみたかったから」の回答率は、農業ア

表3 事業内容別の参加動機 (%)

	農作業ア ルバイト	狩猟免許 合宿	0円免許 合宿
楽しそうだったから	79.2	81.8	85.7
農作業を経験してみたかったから	83.3	45.5	71.4
友人に誘われたから	12.5	27.3	28.6
他の参加者と交流をしたかったから	33.3	9.1	28.6
北海道に行きたかったから	20.8	27.3	85.7
安く免許が取れると思ったから	—	0.0	42.9
狩猟の現場を見てみたかったから	—	90.9	—
その他	4.2	0.0	0.0

資料：表2を参照

アルバイト生は83.3%、狩猟免許生は45.5%、0円免許生は71.4%であり、農業に関心が高いこともわかる。よって、農業自体も参加要因になっているがそれ以外の「狩猟」や「免許」、「北海道」という要素も参加者の参加要因となっている。

2) 参加者の生活

参加者は農家宅に滞在するのではなく、厚沢部町内の合宿所で共同生活を行う。2019年度は住居者のいない教員住宅2棟と2019年3月末まで使用されていた保育園を合宿所としている。教員住宅は男女1棟ずつ（男子寮、女子寮）、保育園は男女混合である。

農作業終了後、参加者はそれぞれの合宿所に戻る。各農家宅で夕食をご馳走になったり、8月中旬から9月中旬にかけては地区ごとに祭りが開催されるため、参加者は祭りで神輿を担いだり、バーベキューをするなど、地域住民と交流する機会もある。また、教員住宅にはシャワーが併設されているが保育所には入浴設備がないため、保育所に滞在する参加者は近隣の町営温泉を利用、もしくは教員住宅のシャワーを利用している（註11）。

夕食の準備は当番制ではなく、「作りたい人が作る」というように参加者が協力し合い準備をしている。保育所メンバーは保育所で、教員住宅のメンバーは男子寮、女子寮のどちらかに集まり、全員で夕食をとる。食後は参加者同士で交流を行い、送別会などのイベントが度々開催されている。また、就寝時間はおおよそ22時である。合宿所の生活では明確なルールがなく、共同生活に関する注意事項は就寝時間についてだけであり、参

加者同士で共同生活を作り上げている。

3) 参加者と地域のつながり

2019年度は2回目以上の参加者が6人であった。農業アルバイトをきっかけとした地域とのつながりを明らかにするために、リピーター参加者（以下、リピーター）を対象に聞き取りをおこなった。なお、リピーターに理科大生は含まれない。以下では、聞き取り調査の結果をもとに、リピーターと厚沢部の関係について記述していきたい。聞き取りは、リピーター6人中5人に行うことができた（表4）。

(1) 農家との関係

リピーターと農家との関係は①アルバイト期間終了後、②滞在期間中の交流の2つに分類される。Bが2019年度に参加した理由は、農家からの連絡で、Fも「Mさん（雇用先農家）と結構連絡を取ってた。ジャガイモを送ってもらったりしてたから、こっちからもお礼のものを送ったりして。Mさんが唐突に電話かけてきて、最近どうって。…（中略）…今年は（厚沢部での農業アルバイトは）難しいかなって思ってたけど、そのタイミングでMさんが手術したりとか、パートのおばちゃんが辞めちゃったりって話を聞いて。」と語っており、アルバイト期間終了後も関係が継続的であることがわかる。

またCは、農家の妻と年齢も近いことから、継続的に連絡をとっており、2019年度はお盆期間の帰省期間も厚沢部町の近隣市町村にある妻の実家帰省に同行するなど、雇用関係を越えた関係に発展している。Dは、雇用先の農家との関係を「雇用とかそういうのふっとばして、友達みたいな感

表4 農楽会参加者の概要と農家、地域との関係

	性別	年齢	属性	出身	2019年度参加形態	参加期間	作業内容	2018年度以前の参加状況	農家との関係	その他の関係	初年度の参加きっかけ・理由	2019年度参加きっかけ	農楽会のアルバイト期間以外の生活
B	男	31	社会人	長崎県	農業アルバイト	7/20～9/30	ばれいしょ、だいこん、かぼちゃ、とうもろこし、キャバツの収穫	2016年度0円免許合宿 2017年度狩猟免許	夕食会へ参加する日帰り旅行アルバイト期間終了後も連絡	参加者同士の交流 地域の商店のひとの会話 合宿所近隣住人との交流・会話 来店時の地域の食堂の人からのサービス	免許の取得をしようと思っ、インターネットで検索。	2018年度は参加していなかったが、農家さんにまた来て欲しいと言われて、自分でも野菜作りをしているので、勉強したいと思った。	長崎でフリーランスの作曲家として活動、作曲の傍ら実家の畑でオクラを栽培し、道の駅で販売している。農楽会アルバイト期間中、畑は両親に任せている。過去に季節労働の生活を1年間しており、山形、愛媛、奄美、小豆島など日本全国を転々としていた。
C	女	41	社会人	大阪府	狩猟	7/20～9/17	だいこん、キャベツ、かぼちゃ、とうもろこし、種ばれいしょの収穫	2018年度0円免許合宿	農家(妻)の実家帰省に同行定期的な連絡	地域のお祭りへの参加	Bからの紹介。	2018年度参加時に狩猟免許取得であることを知り、興味を持った。	農業バイトなどで愛媛や沖永良部へ行っている。農業以外のアルバイトにも従事しており、キャンプ場や飲食店でのアルバイトなど農業以外の住み込みのアルバイトで生計を立てている。
D	男	24	社会人	埼玉県	農業アルバイト	7/28～8/12、8/20～9/20	ばれいしょ、プロッコリーの収穫	2018年度0円免許合宿	温泉や釣りに行く	参加者同士の交流	免許の取得をしようと思っ、インターネットで検索。	農作業アルバイトに集まる人たちに魅力を感じて、	画家として活動、ゲストハウスの内装を手がけたり、グループ展示会も開催。
E	男	19	大学生	宮城県	農業アルバイト	8/10～9/16	ばれいしょ、プロッコリーの収穫	2018年度農業アルバイト		合宿所での生活	長期滞在できるアルバイトをしようと思った。実家生であるため、共同生活にも興味があった。	普段の生活から離れることができる厚沢部の環境に身を置きたい。	宮城県内の大学に通う。
F	男	22	社会人	滋賀県	農業アルバイト	8/17～9/30	ばれいしょの収穫	2018年度0円免許・狩猟免許	定期的に電話来る農産物が届く日帰り旅行	参加者同士の交流 地域のお祭りへの参加	農楽会の取り組みが紹介されているテレビ番組を視聴した北海道の友人からの紹介。	農家さんが手術をした話、パートの方が辞めた話を聞いて参加を決意。	農業や学校給食の調理補助のアルバイト、ゲストハウスの手伝いなど様々なアルバイトで生計を立てる傍ら、バンド活動も行っている。

資料：2019年に実施した聞き取り調査より作成。

じで喋ってくれるし、仕事もそのままの雰囲気が続けられるし…(中略)…かなりアットホームだと思います。K(雇用先農家)さんが結構、温泉に連れて行ってってくれるんですよ。厚沢部町だったり、乙部の方まで車を出してくれて、ここの温泉はどうだって、プライベートでも付き合ってくれる。Kさんにお世話になっている人以外でも、宿舎で暇してる人いたら、釣り行くぞみたいな感じで連れて行ってくれたりとか、僕らのお父さん(のような存在)」と語っており、雇用先の農家と農作業の時間以外でも交流があることがわかる。

BやFは日帰り旅行もあり、Bは「1週間に1回くらい農家とご飯を食べる。農楽会のアルバイト生が帰る時だったら送別会。カンボジア人を4人受け入れて、出面さんも3人いるので、その人たちの何周年記念みたいなものもあるし。雨で作業が早く終わったら、どっか食べ行くとか。次の日休みだよってなったら函館に連れて行っても

らったり。」と語っている。コーディネーターのAは農家に、参加者は「厚沢部町のファン」になってくれる可能性のある人達と伝えている。このように、雇用先農家はアルバイト生と旅行する、独自で食事会などの場を設けるなどして交流を図っている。

(2) その他の関係

その他の関係には①参加者同士の関係、②地域住民との関係に分類できる。①の農楽会をきっかけとした関係には、地域のお祭りへの参加や、参加者同士の交流が当てはまる。参加者は、雇用先農家が居住している地区へのお祭りに参加している。2018年度も地区のお祭りに参加したFは「去年も行って、何人か覚えてくれてる人もいて…(中略)…僕らからしてみればこれが新鮮っていうか、こういうのはここでしか味わえない。みんな(地域住民同士)がみんなの顔を知ってて、そういう人たちが集まる機会みたいなのが中々なくて、それがお祭りになってる。すごく面白い。」

と語っており、地域の人にも顔を覚えてもらっているなど、地域住民との交流も生まれていることがわかる。また、地区のお祭りといった地域住民同士が顔を合わせる場への参加は、アルバイト生にとっても貴重な機会となっている。参加者同士の交流についてBは「(合宿所に) 帰ってきたら『今日何やったの?』『俺カボチャ』『俺ジャガイモ』『俺ブロッコリー』って感じで、それだけで盛り上がれるとこって、ここしか知らないですよ。いろいろな農家を回ってきて、そうなる、こってやっぱりオンリーワンで、ここにしかないものって結構あるなって。…(中略)…あとここは自炊だから、それぞれの農家の野菜をそれぞれが持ち帰って、『たまねぎゲットしたぞ』とか、『ニンジンゲットしたぞ』とか。そういうのが魅力の一つだな。」と語っており、参加者同士での会話を楽しむ様子がわかる。また、Eは「地元だったらこんな広い空を見られないし、ご飯とかも日々美味しく感じるし。…(中略)…働いて眠くもなるし、お腹もすくし。そういう当たり前のことが楽しく感じるというか、地元に行ったら、アルバイトして、お金もらって、家に帰って、携帯いじったり、自分の好きな事やったりっていうのがあるけど、こっちに行ったら、みんなでご飯作ったり、ご飯食べたり。みんなで寝て、みんなで掃除してって、衣食住をみんなで整えてっていうか、当たり前の事を頑張ってる。」と語っており、厚沢部の環境や合宿所での共同生活に魅力を感じている。②の地域住民との関係において、Bは「(合宿所から見て) そこに伊勢谷商店ってある。結構、お酒買いに行ったりして、そこのおばちゃんも『また来たのね』って覚えてもらったりして。S農園(雇用先)の従業員の人の家にお呼ばれして、飲み会したりして、その従業員のお兄さんとか、そこの地域の人とか全員飲んだり。前井食堂(の人)も、3日に1回くらいS農園に来て、顔を覚えてもらって、カツカレー頼んだら、かつを大盛りにももらったり。3年も来ると色々覚えてもらえるっていうのと、なんかまた来たのって言うってくれる人が増えて。こんな、1年の内で夏の間しかないのに覚えてくれるなんて思うので、リピーターになると、(地域の) 温かみに触れるのは多くなりましたね。近所の人も

『これもってけ』ってイモとか、トマトとか色々くれるし。『夜、(合宿所が) 騒がしくてすみません』って謝ると『賑やかでいいよ』って。」と述べており、厚沢部町民との交流も深めていることがわかる。

4. 農家側からみる農楽会

1) 農楽会への入会と受け入れ農家の概要

Aは受入農家の条件として、この事業を単に労働力確保の手段ではなく、厚沢部のファンになってもらう人の受け入れということを理解してもらえらることとして、慎重に農家を増やしている。そのため、農楽会への入会はAの一存ではなく、農楽会会長(註12)やその他の農家と相談し、農楽会の全員の同意を得ることが必要である。以下では受入農家からみた農楽会の役割と参加者との関係についてみてみよう。表5は農楽会所属の農家15戸のうち、聞き取り調査を実施した6戸の農家についてである。栽培品目が多岐にわたり、かつ面積規模も大きい農家が多いことがわかる。

2) 営農への影響

2014年度からアルバイトの受け入れをしているTは、カボチャなどの収穫ピーク時に農楽会のアルバイトが来てくれることで助かっていると語っており、毎年受け入れを楽しみにしている。農繁期で人手が必要な時期の受け入れであるため、農楽会の参加者は重要な労働力となっている。農楽会会長のSは、手間のかかる野菜の作付け面積が増えたと述べ、Rは輪作にも有効なカボチャとブロッコリーの面積を増やしたと述べていた。大規模農家における農業生産にとって、農楽会のアルバイトは欠かせない存在となっている。

3) 参加者(よそ者)が農家に与える影響

Hは参加者との関わりについて、「外の人たちが入ってくることで、考え方がフラットになる。自分たちでは気がつかないことに(参加者が) 気づいて、教えてもらうっていうこともある。」と述べている。また、Mは参加者との交流の中で、考え方を刺激されたと言う。参加者は学生だけではなく、日本全国で農業アルバイトをしている人、海外を旅する人など様々な生き方をしている人がいる。学校教育を受けて就職するだけではない、生き方に触れることで「人間を見る視野が広

表5 農楽会所属農家の概要と参加者の受け入れ

受け入れ農家	栽培面積	栽培品目	農業従事者数	雇用者数	農楽会アルバイト数	受け入れ期間	受け入れ開始
S	80ha	パレイシヨ, だいこん, かぼちゃ, とうもろこし, キャベツ	3人	8人	5人	7/20～9/30(2人), 8/9～8/26, 8/20～9/15, 9/5～9/18	2014
M	60ha弱	パレイシヨ, 黒豆, アスパラガス, キャベツ, ほうれんそう, てんさい	3人	3人	6人	7/20～9/30(2人), 7/31～9/30, 8/9～9/2, 8/17～9/30, 9/5～9/18	2016
T	80ha	だいこん, キャベツ, かぼちゃ, とうもろこし, 大豆, 小豆, 種パレイシヨ, 山ごぼう	4人	8人	3人	7/20～7/27, 7/20～9/17, 8/1～8/14	2014
R	50ha	種パレイシヨ, 小麦, 黒豆, かぼちゃ, ブロッコリー	5人	0人	3人	7/20～9/10, 8/9～8/23, 8/15～8/25	2016
H	30ha	ブロッコリー, パレイシヨ, 小麦, 大豆, 小豆, ハトムギ	3人	2人	4人	7/20～9/30, 7/28～8/12・8/20～9/20(8/13～8/19は帰省), 8/10～9/16	2015
N	40ha	パレイシヨ, かぼちゃ	2人	数人	5人	7/20～9/30, 8/8～8/21, 8/9～8/26, 8/19～9/9, 9/2～9/15	2019

資料：2019年度に実施した聞き取り調査・農楽会資料より作成。

注1) 受け入れ期間は各参加者の当初の予定である。日程が確定していない参加者、滞在期間中に日程変更を行った参加者もいる。参加者についての詳細な調査が困難であったため、それらを表に反映していない。

注2) H, Nは農楽会以外でも個人でアルバイトの受け入れを行なっている。雇用者数は農繁期における雇用人数であり、通年雇用者及びパートなどの臨時雇用者数を含む。

がった」とMは語る。

鬼頭(1998)は環境運動における「よそ者」の役割に関して、「『よそ者』は地域に埋没した生活では得られにくいより広い普遍的な視野を環境運動に提供し、ごく当たり前だから気づかれない自分たちの自然とのかかわりを再認識するなど新たな視点を外から導入する役割がある」と述べている。よそ者という存在は、地域に新たな風を吹き込む存在である。農楽会の参加者と農家の交流においても同様で、参加者との交流が農家側に新たな視点をもたらしている。

5. まとめ

本研究は、①農業アルバイトが多様な関心を持つ人々を地域に惹きつけることが可能であるか、②農業とそれ以外の取り組みとの連携実施体制及び受入主体の分析、③農業アルバイトを通じて地

域を訪れる人々の地域との関係性の構築を明らかにすることで、都市農村交流としての農業アルバイトの可能性について検討することを目的としている。

①については、農業だけではなく農業と異なる分野との組み合わせで、多様な関心を持つ人々を地域に惹きつけることが可能になることがわかった。農楽会の事例においては農作業への関心だけではなく、狩猟免許や自動車免許の取得への関心、北海道という地域への関心など、参加者側の関心が地域の取り組みとマッチングすることで、参加につながっていることがわかった。

②の農業以外の取り組みについて、農楽会の農業アルバイト事業では、農作業以外の時間に狩猟免許講習や自動車学校の教習を受けることが可能である。受け入れ主体である農楽会は、農業アルバイトの募集に加え、地元の猟友会や自動車学校

等との連絡・調整を行っている。農楽会の中でそれらの調整を行っているのは主に農楽会事務局であり、事務局は外部との交渉だけではなく、農家と参加者間での調整や参加者の滞在期間中のマネージメントを行うなど多様な役割を果たしていることが明らかになった。

③については、農家と参加者の交流が農作業時間以外にも行われていること、参加者と地域住民との関係性も構築されていることがわかった。アルバイトを単に労働力と見なすことなく、地域のファンになってもらうという農家の意識が雇用関係を越えた関係人口ともいえる新たな結びつきを生んでいる。また、農家と参加者、参加者同士の関係だけではなく、地域住民との関係性も生まれているなど、参加者の中には農楽会という組織を越えた地域と関係性を構築している者もいた。

このように、農楽会は農業だけではなく、狩猟や自動車などの免許の取得などを求める層を農業アルバイトの対象として獲得している。そして農業アルバイト受け入れをきっかけとして地域内で様々な交流が生まれており、地域との関係性構築の契機となっている。よって、都市農村交流として農業アルバイトを捉える場合、農作業を行うことだけが目的ではない労働者の意識を受け入れ側が認識すること、そしてそれぞれの地域の特性を生かした事業の構築が求められる。また、農作業時間以外にも、交流の時間や地域行事へ一緒に参加するなど、交流のきっかけを受け入れ側が提供することも重要である。

註)

註1) ①の参加者を農業アルバイト生、②の参加者を狩猟免許生、③の参加者を0円免許生と記述し、①から③のすべてを対象に記述する場合は、参加者と表記する。

註2) 第一種銃猟は装薬銃・空気銃、第二種銃猟は空気銃のみであるため、第一種銃猟取得を目指す場合、第二種は不要である。よって、狩猟免許生は網猟、わな猟、第一種銃猟最大3つの免許取得を目指すことができる。なお、農楽会での実施はあくまで試験対策であるため、実際の免許取得は各都道府県が実施する試験に合格しなければならない。

註3) 講習費がアルバイト代により相殺されるかどうかについては、参加者の就業日数による。普通二輪

や大型特殊免許の場合は0円になることが多いが、普通車免許取得の場合、費用が30万円程度必要なためアルバイト代を差し引いて0円になることは少ない。

註4) 食費は参加者側で管理している。農家から野菜を提供されることが多いため、参加者それぞれの食費負担は1週間あたり1,000円程度である。

註5) 参加者の受け入れ期間を4つに区分し、それぞれの時期で人手が必要な農家の中で割り振られる。2019年度の区分は①7月20日から7月末、②8月1日から8月13日まで（お盆前まで）、③8月15日から8月末まで、④9月1日以降である。農家と参加者のマッチングに関しては、農楽会の総会（例年7月開催）にてくじ引きで行なわれる。

註6) 昼食は、農家に送迎してもらい合宿所に戻って自炊することや、自分で用意した弁当などを作業場へ持参することもできる。その場合、昼食代は不要である。

註7) 東京理科大学長万部キャンパスには、基礎工学部1年生約300人が在籍していた。基礎工学部の長万部キャンパスの利用は2020年度までで、2021年度以降は経営学部内の国際的な経営を学ぶコース及び理工学部内の留学生を対象としたコースの学生が在籍予定であった。しかし新型コロナウイルスの影響により2020年度の基礎工学部1年生は東京都葛飾区のキャンパスでの授業実施となり、2021年度の長万部キャンパスでの全寮制教育も見送られた。

註8) 2018年度もAの妻は農楽会をサポートしていたが、事務局としては2019年度から、2015年度まではAが一人で事務局を担当しており、2016年度はAと地域おこし協力隊のI、2017年度・2018年度はA、地域おこし協力隊Yで運営していた。

註9) 厚沢部町内でのアルバイト開始後の日程調整は、事務局は介入せずに参加者と農家で直接行う。

註10) 2019年度農楽会参加者の資料送付先データによると、北海道からの参加は6人、東北4人、関東22人、北陸1人、関西6人、中国四国2人、九州5人である。なお、実際の居住地と資料送付先が異なる参加者もいる（理科大生は北海道長万部町在住であるが、住民票は実家の場合が多い）。

註11) Aが厚沢部町に掛け合い、参加者の温泉の利用料金は一回100円である。通常は大人380円（2019年8月末時点）。毎週金曜日は定休日であるため、保育園を合宿所として利用している参加者は、教員住宅のシャワーを利用するか、各就業先の農家と近隣の温泉に行くなどして対応している。

註12) 農楽会会長は、農楽会の代表として最終決定

権、事務責任者、出納責任者としての役割を持つ。

参考・引用文献

- 岩崎真之介（2020）「愛媛県JAにしよう『みかんの里アルバイト事業』の仕組みと新たな展開－果樹大産地はいかにして全国から多数の短期雇用を確保しているか？－」『JCA研究レポート』 9
- 小田切徳美（2014）『農山村は消滅しない』岩波書店
- 鬼頭秀一（1998）「環境運動／環境理念研究における「よそ者」論の射程：諫早湾と奄美大島の「自然の権利」訴訟の事例を中心に」『環境社会学研究』 4（0）， pp.44-59
- 福澤萌（2018）「流動的農村労働者の社会・経済的位置とその意識：北海道の園芸・酪農地域を対象に」，北海道大学大学院農学院学位請求論文
- 曲木若葉「農山村地域における臨時農業労働力確保の取組と課題：愛媛県みかん産地を事例に」『農業経済研究』 90（4）， pp.345-350
- 李哉法（2004）『野菜・果樹地帯における季節農業労働者の確保と雇用：労働市場のサービスの提供がもたらす効果と問題』農政調査委員会
- 「長万部入寮再び延期＊東京理科大学＊コロナで本年度に続き」，『北海道新聞』，2020年7月2日，朝刊，p.25（北海道新聞記事データベース2020/7/24最終閲覧）
- 環境省，「狩猟免許を取得する」<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort8/hunter/license.html>（2020/07/23最終閲覧）
- 東京理科大学HP，「東京理科大学における学部・学科の再編について」<https://www.tus.ac.jp/today/archive/20180726100.html>（2020/07/23最終閲覧）
- 東京理科大学HP，「2020年度に基礎工学部に入学される皆様へ」<https://www.tus.ac.jp/today/archive/202003253001.html>（2020/07/23最終閲覧）
- 北海道厚沢部町移住・定住&観光情報総合サイト「厚沢部町について」<https://www.sutekinakaso.com/about/>（2020/07/23最終閲覧）

